体幹部の五行の経脈と背俞穴についての考察

遠藤 次郎

Consideration on the Five Meridians and Back Points on the Body

Jiro ENDO

今日の針灸治療において、背俞穴を用いた治療法は臨床的に重要な位置を占めている。たとえば、太陽膀胱経上の背俞穴のうち、肝俞は肝臓の治療に、腎俞は腎臓の治療に用いられている。それにもかかわらず、この治療法の基礎理論となるべき経絡の裏付けは素問や靈樞の古典の中にほとんど見出されない。このため現在では、背俞穴を用いた治療法は手足の十二経脈に従った治療法から遊離している。

著者は、素問および靈樞中の経脈論を検討しているおり、背俞穴の基礎理論と目される経脈論を見出した。この説はまとまった形では記されていないが、素問や靈樞に散在する記載を整理することにより再構成することができる。本稿では、これを体幹部の五行の経脈論と呼ぶことにする。この経脈論に基づけば背俞穴に経脈の裏付けを与えることが可能となる。

本報では、最初に体幹における五行の経脈論を再構成した過程を述べ、次に背俞穴と体幹の五行の経脈説との関係について考察する。

体幹部における五行の経脈論について

素問「水熱穴論」に、腰部と頭部における「五行、行五」なる取穴法、ならびに腹部における同様な取穴法がみられる。

水熱五十七處

尻上五行，行五者此皆腎輸也

伏菟上各二行，行五者此腎之所衝也

熱病五十九輸

頭上五行，行五，以越諸陽之熱逆者¹⁾

ここにみられる「五行，行五」穴とは平行して走る5本の経脈と、各経脈ごとに配された5つのツボ、計25穴のことである。しかしながら、ここに述べられている説を今日の経絡説で解釈することはできない。たとえば腎経上のツボと記されている「尻上五行，行五」穴は今日の経絡説では腎経ではなく太陽膀胱経上のツボである。また、伏菟の上の腎の衝するところ、すなわち衝脈はここでは2本と記載されているが、今日のものは1本のみである。またここでは「尻上五行」と「頭上五行」を水俞と熱俞として対立的に述べているが、この取穴法に現今の経脈説を適用すると、同一経脈上（太陽膀胱経）に陰穴と陽穴を求めることになり不合理が生ずる。

以上の諸点から、上述の経脈説は現在一般的な手足を中心とした十二経脈の説とは異なっていることがわかる。

この「水熱穴論」の取穴法と同じ立場で経脈を扱っている例の一つに素問「骨空論」の督脈の記載があげられる。

督脈起於少腹，以下骨中央，……

合少陰，上股内後廉，貫脊屬腎。

與太陽起於目内眦……別下項，循肩膊内，俠脊抵腰中，入循膂絡腎而止。

其少腹直上者貫齊中央，上貫心入喉……

ここに述べられている督脈は上下に二分され、腎臓より上を陽経（太陽膀胱経）と関連させ、腎臓より下を陰経（少陰腎経）と関連させている。この見方で前述の「水熱穴論」を読めば、「水熱穴論」で「尻上五行」を腎経上のツボとしている点や、陽穴

と陰穴を上下に対立的にとっている点を理解することができる。

なお、「骨空論」の督脈の記載でさらに注目される点は、項部から下る督脈の走向を脊柱を挟むと表現している点である。このことから、督脈は単に正中線ばかりでなく、脊柱に平行する他の経脈をも包含していると読みとることができる。難経の説²⁾に基づいている今日の経脈説では督脈は正中線のみとされ、また、この督脈とそれに平行する経脈との関連性は全く認められない。しかしながら、「骨空論」の督脈の記述では、背部の正中線とこれに平行する他の四行線とは一定のつながりをもって認識されていることがわかる。

素問「骨空論」の督脈と極めて近く、また、素問「水熱穴論」の衝脈とも関連している記載が、靈枢「五音五味」の任脈と衝脈の記述に見出される。

任脈衝脈皆起於胞中，上循脊裏，為絛絡海。其浮而外者循腹上行，會於咽喉，……。

ここでは任脈を二つの部分に分けている。その一つは「胞中」から「背裏」に至る脈であり、これは経脈の海とみなされている。もう一方は、腹部の正中線を上る脈であり、これは、陽気が加わることによって精気が経脈の海から溢れ出たものと述べられている。

次に、この「五音五味」と先に引用した「骨空論」の記載に基づいて、督脈について考察を加える。

「骨空論」では督脈を三つの部分—督脈下部、督脈上部、体幹前面の正中線—に分けている。この督脈の三つの部分のうちの督脈下部と体幹前面の正中線の脈は部位の上では「五音五味」の任脈の二つの部分に一致する。したがって、任脈は督脈下部の経脈の海から体幹前面の正中線上に溢れ出た督脈の別称といえる。督脈上部については他の督脈の部分との関連がどこにも示されていないため、これを考えるには若干の推測が必要である。「骨空論」では、督脈を、下部は少陰腎経と、上部は太陽膀胱経と関連づけている。通常、臓と腑との関係は、臓は貯臓、腑は輸送の役割をもつとされている。従って、腑に相当する督脈上部は臓に相当する督脈下部に貯蔵されている精気が外に輸送されたものとみることができる。以上のことから、体幹部の正中線を通る督脈

の三つの部分の関係は次のように考えることができる。即ち、督脈下部は精気の源泉部であり、督脈上部と体幹前面の脈は、この源泉部から精気が溢れ出た時の脈である。

「五音五味」で、その他に注目されるのは衝脈の記述の仕方である。ここでは、衝脈は任脈と一緒に扱われている。従って、胸腹部の正中線（任脈）とこれに平行する四行線（衝脈）は、背部の五行線と同様に、相互にきわめて近い関係にあることがわかる。

正中線とこれに平行して走向する四行の経脈の関係を示唆するものとして、素問「氣府論」の頭部の経脈についての記述があげられる。

足太陽脈氣所発者，……

入髮項二寸間半寸，傍五相去二寸。

其浮氣在皮中者凡五行，行五，五五二十五。

ここでは、正中線ならびに左右の第二行目の経脈に陽気が加わり、脈中の精気が溢れ出すことによって、五行の経脈となるとしている。即ち、五行の経脈の関係では、正中線より外方にある脈ほど陽性が大きいとみることができる。

これまでにみてきた素問や靈枢に散在する記載を総合すると、体幹部における五行の経脈説を次のようにまとめることができる。少腹から生殖器を経て腎臓に至る脈がいわゆる経脈の海で精気をたくわえている部分である。この部分に陽気が加わると、脳から腎臓に下る督脈の上部や胸腹部の任脈に精気が流れる。さらに陽気が増すと、衝脈や衝脈と同様、正中線に平行して走向する背部や腹部の第二線、さらに第三線の経脈上に精気が流れ出す。

体幹部の五行の経脈と臓腑との関係

体幹部における五行の経脈は体内の五臓六腑とも関連している。この関係を示唆するものとして靈枢「逆順肥瘦」の衝脈の記述があげられる。

少陰之脈独下行何也，……

夫衝脈者五藏六府之海也，五藏六府皆稟焉。其上者……，其下者注少陰之大絡……。

ここでは、衝脈は五臓六腑に対し精気を与える海とされ、少陰腎経または少陰腎経の大絡と同等に扱

われている。この見方は、素問「上古天真論」の「腎水を主り、五臓六腑の精を受けてこれを蔵す」という考え方や、腎から他の四臓に陰気をめぐらせることを論じた靈樞「衛氣行」の見方にきわめて近い。これらのことから、衝脈は腎臓に近い源泉部において五臓六腑に腎臓の精気を輸送する役割を果たしていることがわかる。衝脈の源泉部は靈樞「五音五味」にみる如く、経脈の海である督脈の下部と場所的に一致する。従って、督脈の下部は、経脈に対しては経脈の海の役割を、臓腑に対しては五臓六腑の海の役割を果たしているといえることができる。

以上の点から、体幹の五行の経脈と五臓六腑とは督脈下部の精気の海を媒介として相互に関連していることがわかる。

背俞穴について

背俞穴の取穴法が素問「水熱穴論」の熱俞の記述の中に見られる。

五蔵輪傍五、此十者以寫五蔵之熱、
凡此五十九穴³⁾者皆熱之左右也。

ここでは、脊椎両側の背俞穴は、熱により督脈から左右に浮き出した反応点と見なされている。一方、背俞穴を上部の督脈上に取穴する例が素問「刺熱論」に存在する。

熱病氣穴⁴⁾、三椎下間主胸中熱、四椎下間主鬲熱、
五椎下間主肝熱、六椎下間主脾熱、七椎下間主腎熱、
榮在項上三椎、陷者中。

ここでは、督脈上の背俞穴は、熱のため督脈の下部の精気が上衝したものと見なされている。

「水熱穴論」および「刺熱穴論」では共に、督脈にある五臓六腑の精気の海が熱により溢れ出した反応点を背俞穴と見なしている。また、「水熱穴論」では精気が督脈の左右の外方に溢れ出すと述べ、「刺熱論」では精気が督脈上部に溢れ出すと述べているが、これらは共に体幹の五行の経脈説で説明することができる。即ち、前者は督脈の左右の外方に位置する経脈ほど陽気が高いという見方にに基づき、後者は督脈の上部の脈は下部よりも陽性が大いという見方に基づいている。

以上の点から、体幹の五行の経脈の源泉部である督脈下部からの反応点が背俞穴であること、ならび

に、その反応の出方は体幹の五行の経脈論に従っていることがわかる。

摘 要

1. 今日の経脈説では体幹部の正中線の経脈とそれに平行する経脈との間に関連性を認めていない。しかしながら本稿では、素問「水熱穴論」「骨空論」「氣府論」ならびに靈樞「五音五味」を考察し、体幹部の五行の経脈は互に関連しているという経脈論を明らかにした。即ち、督脈の下部のいわゆる経脈の海にたくわえられている精気は、この部分に陽気加わると、督脈の下部から上部（背部正中線）と任脈（腹部正中線）に流れ、陽気が高まるにつれて、その外方の経脈（背部と腹部の二行線）、さらに外方の経脈（背部と腹部の三行線）に流れ出すという見方を前述の古典文献中に読みとることができる。

2. 靈樞「逆順肥瘦」「衛氣行」ならびに素問「上古天真論」を考察し、体幹の五行の経脈は督脈下部の精気の海を介して五臓六腑と関連していることを推定した。

3. 素問「水熱穴論」「刺熱論」を検討し、背俞穴は督脈の五臓六腑の海の精気が熱によって上部（督脈）あるいは左右の外側（背部の二行線）に溢れ出した反応点とみなされることを明らかにした。

4. 上述したような五臓六腑と関連した体幹部の五行の経脈を認めることによって、背俞穴を理論的に説明することができることを指摘した。

註

- 1) 本報における素問の引用文は何の指示もないものはすべて『黄帝内経太素』（人民衛生出版社）中の該当する文を採った。
- 2) 難経「二十八難」
- 3) 五十九穴は、「水熱穴論」中に「熱病五十九輪」「氣穴論」中に「熱輪五十九穴」とある。熱俞の総数。
- 4) 「熱病氣穴」は太素にない。素問により、これを補った。

(1985年10月3日受付)